

オーバーロード二次創作 久々ログインで異世界転移

結城マサヒト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

むちむちぷりr——丸山くがね様著、オーバーロードの二次創作です。

オリキャラである至高の41人の一人が、モモンガと一緒に転移したお話です。

基本的に書籍・ウェブの設定を踏襲し、違う選択を取った際のお話、オリキャラや捏造改竄等が含まれます。

人類から見て救世主ルートと悩みましたが、魔王ルートが好きなので、魔王ルート寄りになる予定です。

DMMO—RPG ユグドラシル

12年続いた大人気体感型オンラインゲーム

終了3年前に、ゲームから離れていた主人公（オリキャラ）が、サービス終了前にログインします。

モモンガ一人ではなく、二人で転移したらどうなるの？と妄想しながら書いていきます。

大体週1更新予定で、思ったより進んだら追加でアップしたいと思います。

他の皆様の投稿を見て、自分も書いてみたくなりました。

初投稿で拙い所が多いと思いますが、多少なりともお楽しみ頂ければ嬉しいです。

目次

プロローグ	1
ナザリックへの帰還	5
執事とメイドとの邂逅	9
再会	18
アルベドの設定	27
闇妖精の双子	32
訓練―前編	47

プロローグ

西暦2138年某日

一人の男が、自宅のマンションに帰ってきた。

——ようやく終わったか。

そんな感傷を抱きつつ、一人暮らしにしては広い2LDK

半自律型無人ハウススキーパーサービスを利用していなければ、埃に塗れていたであろう自宅に久々に腰を落ち着ける。

ここしばらくは、帰って来てはいたものの、寝る為だけの場所になっていた。

「さて、久々の自由な時間だと思つて満喫しようか。」

そう呟いた男、いつつじやすひろ五辻泰弘はソファアに体重を預ける。

というのも、自身は全く乗り気ではなかったのだが、会社命令で3年前に所謂発展途上国、その支社の立ち上げに行っていたのだ。

退職するか本気で悩んだのだが、所属している会社と出向先の子会社で、二重に給料が出る事もあり赴任する事を決めた。行つてしまつたからには仕方ないとしつかりと働いてそれなりに評価されていたのだが・・・1年後に軍事クーデターが発生。

自らはクーデターの際の混乱に乗じた襲撃に巻き込まれ、命は無事だったものの負傷。

日本との外交関係を気にしてか、クーデターを起こした軍事政権側から治療は受けれたものの、情勢が落ち着くまで軟禁。ようやく開放されたは良いが子会社は撤退し、日本の本社へ召還。

戻つてみたら当たり障りの無い、負傷によるお悔やみポストが割り当てられていたのだ（何ヶ月も職場を離れており、赴任していた人員が戻つてきて、人手は余っていた）。

早期退職も可能との話も受けた為、辞表を提出して身辺整理を済ま

せて退職してきた所である。

退職した会社はかなり大手の商社の為、周りからは憐れみの目で見られたが、泰弘^{やまひろ}本人は実はそんなに気にしていなかった。

元々海外赴任も、本当は行きたく無かったのだ。会社命令で赴任し、行ってみると案外面白くなつたが、クーデターの際に撃たれたせいで（本社の避難判断が遅れて巻き込まれた、という事情も含めて）、退職金に色もついた。

「本当に久しぶりだ・・・せめてインフラ——通信関係だけでもまともな国だったら良かったんだけどなあ。」

そう呟きつつ、やや大きめの箱に大事にしまわれていた、体感型ゲームコンソールを取り出し、起動していく。

海外赴任するまで、泰弘はDMMO—RPG<Dive Mass
ively Multiplayer Online Role
Playing Game> 仮想世界で現実にいるかのごとく遊
べる体感型ゲーム、その中でも一際人気であったYGGDRASIL^{ユグドラシル}
というゲームをプレイしていたのだ。

本当は赴任先でも休日ぐらいはプレイしたかったのだが、赴任先の
通信技術では、通信速度、容量共に満たせずプレイ出来なかったのだ。
しかし、当分は働かずとも十分に暮らせる資金も手に入ったので、
しばらくはプレイ出来なかった時間を取り戻そう。と考えているの
だった。

しかし——

「.....ユグドラシル、サービス終了のお知らせ!?!?...嘘だろ
!?!」

プレイしようとコンソールを起動し、ゲームを起動する前の公式
ページを開いた途端に飛び込んできたのは、受け入れ難い情報であつ
た。

全盛期よりはプレイ人口が減っていたものの、3年前はサービス終了という話は一切無く、そんな心配はしていなかったのだ。

赴任先からは、ユグドラシルの情報を見てしまうと日本に帰りたくなくなってしまったので、情報を調べていなかった事が裏目に出てしまった。

「……しかもサービス終了は今日じゃないか！……くそ！とにかくログインして……」

すぐにログインボタンを押すものの、3年間分のバージョンアップインストールが始まり、焦りを生む。現代では高速回線とハードの処理能力の高さにより、それほど時間はかからないが、今は1分1秒が惜しい。

現在時刻は22時30分。バージョンアップ終了までは1時間と表示されており、サービス終了まで僅かな時間しか残されていない。

苛立ちを覚えながら、ふとフレンド用メッセージの通知がある事を確認し、開いていく。

現状を尋ねるメール

近況報告をしてきているメール

引退報告メール

かつてユグドラシルで共に歩んだ友人たちからのメールだった。

「……こんな事なら、帰国上の手続き——は無理にしても、ほとんど必要の無い引継ぎを放り出してでも、ログインすべきだったかな……」

ここ一ヶ月は日本に居たのだから、ログインしていればもう少しはユグドラシルに別れを告げる時間が、何よりかつての友人たちに会う時間があったのだ。

そんな後悔を抱く中、最後のメールを開く。

「モモンガさん……やっぱり貴方は居ますよね。」

——ユグドラシル最後の日を、皆で集まって過ごしませんか。——

ユグドラシルをプレイしていた際に所属していたギルド、＜アインズ・ウール・ゴウン＞そのギルド長であるプレイヤー、そして友であるモモンガからの、招待状だった。

バージョンアップの残り時間と現在時刻を確認し、溜息をつく。

「何でもバージョンアップの予測時間はズレるんだ……。」

メールを読んでいて思ったより時間が経過していたが、現在時刻は23時55分。

ほぼ更新は終わっているが予定の時間をオーバーしている。

ログインしたらすぐに会おうーモモンガさんは絶対に最後まで居るだろう。

それに——今日が最後の日だ。他の皆も何人かは居るだろう。

そう考え、バージョンアップ完了の文字を見つつ意識がログイン特有の暗転する瞬間を迎える。

——23:56——

一人のプレイヤーがユグドラシルへ、＜アインズ・ウール・ゴウン＞へと帰還した時刻である。

ナザリツクへの帰還

ユグドラシルへのログインが完了し、黒曜石の輝きを放つ円卓が中央にある部屋へと出現する。

プレイヤー・ネーム『ヤスヒロ』

黒を基調として、白や赤の装飾が入っている足元まで覆うローブを纏い、青い刀身が異彩を放っているが、一見すると儀礼用のような細剣を腰に差している。

顔は一見人間種とあまり変わらないようにも見えるが、頭部から二本の振れた角が生えており、何より背中にある漆黒の翼が人間種ではない事を物語っている。

アンデットの種族に属する生ける屍リビングデッド、☒屍キョンシーを経て得ることが可能な種族、飛天夜叉ひてんやしやである。

ちなみにプレイヤーネームは初DMMO—RPGという事もあり、あまり考えず本名で入力してしまった結果である。後々少し後悔し、課金アイテムで名前を変更する事を考えた事もあったが、愛着が出来てしまったので結局そのままにしている。

「この感覚、久しぶりだなあ…。」

およそ3年ぶりのユグドラシルキャラクターに感慨を覚えつつ、慌てて辺りを見渡すが、荘厳な部屋に相応しい沈黙が広がっており、ヤスヒロ以外のプレイヤーの姿は無い。

「まさか…皆もうログアウトしてしまったのか!?!….:….:そうだ!」

慌ててコンソールを開き、ギルドメンバーのみ閲覧する事が出来る、ギルドメンバーのログイン状況を確認する。

しかし、記載されているほとんどの名前が灰色——非ログイン状態になっているが、

自らとギルド長である『モモンガ』はログイン状態である白文字で表示されている。

「モモンガさんはいる……——モモンガさん！お久しぶりです、ヤスヒロです！」

モモンガがログインしている事を確認し、すぐにプレイヤーチャットにてコールを行う。

しかし、返ってきた応答は『現在、対象のプレイヤーチャット機能がオフとなっています。』というシステムメッセージ。

「うおおいーこんな時にーうぐ……どこだ……自分ならどこに居る。」

プレイヤーチャットが繋がらなかった事に焦りつつ、自分ならユグドラシル最終日にどこに居るかを考える。

ナザリック地下大墳墓以外——それは自分なら除外する。

ユグドラシルで歩んで来た場所は多くても、やはりホームはナザリック地下大墳墓だ。

10階層からなるナザリックを、思い出しながら考える。ふと二階層のとある場所で思考を止め、自分ならそこに居るかもしれない——という考えを抱く。

しかしそうなると、モモンガさんなら宝物殿のパンドラズ・アクターだ。

かつてモモンガさんに案内されて、パンドラズ・アクターに初めて会った時の自慢気な様子を思い出しながら考える。

モモンガさんは宝物殿か。

そう考え、自らの指にはまっているリング・オブ・アインズ・ウル・ゴウン——アインズ・ウル・ゴウンのメンバーすべてが保有しているマジックアイテムで、ナザリック地下大墳墓内であれば、一部の場所を除いて自由に転移出来るようになっていた。——の能力を使い、転移しようとする。

転移しようとしたその瞬間、本来あるべき物が、鎮座していない事に気付く。

記憶通りであれば、そこにはギルド武器が——ヘルメス神の杖を
モチーフとしたスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンが鎮座し
ていたはずだ。

各ギルドにつき一つしか所持が出来ず、ギルド武器が破壊されれば、ギルドの崩壊を意味する。だからこそ、安全な下階層であるここに保管されていた。

ヤスヒロもギルド武器を作成する為に、レアモンスターから極稀にドロップするアイテムを得る為有給を取ったりと、思い出深い一品だった。

「……ギルド武器がここに無いという事は……玉座の間？」

確信は無いが、モモンガさんは非常に和を重視し、自分勝手な行動はほとんどした事がなかった。そんなモモンガさんがギルド武器を持ち出したとしたなら、勘に近いものであるが、玉座の間に居るような予感があった。

しかし、10階層はリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンによる転移が禁止されている区域が多く、玉座の間は転移禁止区域に指定されていたはず。

玉座前の広場に転移するか——そう考え現在時刻を確認し、衝撃を受ける。

——23:59:50——

残り10秒——転移しても間に合わない時間だ。

久しぶりのナザリックに感慨を覚えてしまい、時間が思ったよりも過ぎてしまった——。

ならばと一縷の望みをかけて走り出す。

きつちり24時ではなく、サーバーダウンが1秒でも長くズレ込む事を願って。

本当は広間まで転移すれば一番早いのだが、転移を行う事によって、サーバーから弾き出されてしまう事を恐れて（転移を行うと、システム上再読み込みがかかってしまう為、過去のメンテナンスの際は、メンテナンス時間直前に転移を行うと、いち早く強制ログアウト

がかかってしまうという事例があった。

「頼む………最後ぐらいずれ込んでくれ！」

弾くように扉を開き、まるで白亜の城のような荘厳さと絢爛さを備えた世界を走る。

磨き上げられた通路を、開いたままにしたミニステータスウィンドウ、その現在時刻を注視しながら走る。

59:55、56、57、58——間に合わない事はわかっている。だからこそ強制ログアウトされないように祈りつつ注視する。
59、00。

円卓の間を出て一つ角を曲がった所で時間が来る。ゴクリ、と息をのみ——

1、2、3——

「いよっしやあああああああ!!」

本来終了時間であった、24時を過ぎても強制ログアウトが起こらない。

その事に歓喜を覚えて叫びながら、二つ目の角を曲がる。

曲がった所で、前方に驚いたようにこちらを見つめる姿があった。

一瞬ギルドメンバーの誰かかと期待したものの、すぐにナザリツクに41人居るNPCメイドの一体だとわかる。

本来であればじっくりと見たい所であるのだが、サーバードウンが延期になったとはいえ、それが1分なのか1時間なのかわかっていない以上、その余裕は無い。

そのままメイドの前を駆け抜けようとして——

「……………ツ……………ヤスヒロ様！」

あり得ないはずの出来事が起こり、足を止める。

執事とメイドとの邂逅

「…………ツ…………ヤスヒロ様！」

玉座の間を目指して走っていたが、どこからか声をかけられて慌てて止まる。

振り返って声の主を探してみるが、声のかかった方向には豊かな金髪が肩から流れ落ちている、顔立ちのはつきりとした美女。着ている服はメイド服で、豊かな双丘がメイド服の胸の部分を押し上げている。——レベル1で構成される41人のメイドNPCの一体、——少し考えて思い出した名前は、確かシクスス…………いや、この少し大人びている感じはソレイユだったはず。

お淑やかそうな印象だが、現在の表情は驚愕で彩られている。

「えつと…………もしかして誰か擬態か変身で真似ています？メイドNPCの格好のようですけど…………もしかして、モモンガさん？」

「いえー私がモモンガ様などと、そのような恐れ多い事はございませんー！」

「…………？では、どなたですか？」

「…………いきなり大声でお声をかけるといふ不作法、申し訳ありませんでした！私はメイドのソレイユと申しますー！」

見た目は完全にメイドNPCの内の一体だが、ヤスヒロのプレイヤーネームを含めて声をかけてきた事で、プレイヤーだと判断して声をかける。しかし、返ってきた言葉は否定。ならば誰かログイン情報を見逃していたか…………？そう判断して再び問いかけるも、返って来た言葉はNPCであるメイドだという。

「…………ソレイユ？確かにその姿はメイドNPCのようですが…………ツ…………!？」

ソレイユという名前と姿には覚えがある。ヤスヒロは3年前の時

点で存在したナザリック地下大墳墓に作成された固有NPCのほぼ全ての名前を覚えていたからだ。

元々記憶力は良い方で、新卒入社の際に営業に回された経験から、一度会っただけの人物の名前を覚え、再び会った際にスラスラと名前を呼ぶと受けが良い事を学んでいた。

その時の経験から固有名は覚える癖がついている。

もちろん癖というだけではなく作り込みが好きで、ナザリックに所属するNPC達が大好きだった。——海外に居る時に何度も夢に出たり、思い返したりするほど。

皆で議論し、莫大なアイテムと資金を投入して作り上げたナザリックを幾度も歩いて周り、NPCの設定を幾度も読み、そして恥ずかしながら、返事は無いとわかりつつNPC達に話しかけるといふ事もしていた。

だからこそ訝しげに思う。最後に見た際はこんな会話マクロが無かったはずだし、なにより会話が成立しているという事はNPCではあり得ない。……誰かの悪ふざけかな？そう思っただけで看破の魔法を使用する為にコンソールを開こうとして、慌てる。

……コンソールが浮かび上がらないのだ。

「……どうなってる!？」

「——申し訳ありません!私が偽者であるという思いを抱かせてしまうような行動を取ったのでしょうか?でしたら、ご命令とあれば死して忠誠を証明いたしてみせます!どうかご下命を!」

「……!?いやいやいや、どういう事ですか。どうもステータス表示もコンソールも不具合が起きて表示されないみたいなんですよ!」

「……申し訳ございません。無知な私ではこんそーるなるものが何なのか存じ上げず、お答えする事が出来ません。どうぞ、如何様にも処罰してくださいませ。」

更に二度ほどコンソールを起動させようとするが、反応はない。

視界に視線を走らせると、普段は表示されているHPとMPの表示

も消えている。

慌てていると、メイドNPC——ソレイユの姿をした人物が、まるで本当に命令したら自害してしまうのではないかという気迫で跪いてくる。

非常事態であり、不具合が発生している事を伝えるも、まるで生きている人物が忠誠を誓う相手に話しているように返答してくる。

跪きながらあげられた顔には、悔しさと申し訳なさが伺えており——

違和感に気付く。

……どういう事なんだ？

まず出会った時の状況からしておかしい。

そもそも何故、驚愕の表情を浮かべていた？

ユグドラシルには、外装の表情は固定されて動かないことが基本。なのに複雑に表情を変え、尚且つ会話の際に口が動いて言葉を発していた。

これはNPCでもあり得ないが、プレイヤーでもあり得ない事だ。その事に気付いて驚愕するものの、意外とすぐに冷静になる。

まさか——夢を見ているのか？そう考えるもあまりに現実感が
ありすぎる。

もしくは、自分は正気で無くなったのだろうか？

思考を巡らす沈黙の間にもソレイユだという人物が不安を深めて
いるような空気を察し、意を決して再び声をかける。

「……すみません、色々と混乱していました。どうぞ立って下さい。」
「そのような！メイドである私如きが至高の方々であるヤスヒロ様のお手をお借りするなど！」

「——気にする事はありません。それとも、私の手では不足ですか？」

「……そのような！過分すぎる程です……。……ありがとうございます！」

一先ず余り不安にさせても悪いなと考えて、手を差し出す。遠慮しているようだが、半ば強引に言い募るとおずおずと手を取って立ち上がる。

特に他意は無かったのだが、手に触れた際に感じた手の感触も、本当に現実のように感じる。

そしてその感触を得た際にふと、ある考えが思い浮かぶ。

——仮想現実が現実になったという可能性。

あり得ないと思いつつも、自分が正気だと仮定すると、他に思い浮かばない。

本来、電腦法によって味覚・嗅覚は完全に、触覚もある程度制限されているはずだが、触覚においてはそれが無い。だとしたらこれは仮想現実ではなく、現実ではないのか？

そもそも自分が正気かどうかなど自ら証明出来るはずもない。

ならば今が現実。この世界を生きる事に何の問題があるのだろうか？

なにより、そうなければいいのにな。という想いを抱いた事が幾度もあつたではないか。

冷静を保っている自分に、多少の疑問を抱きつつも、この世界が現実だと考えて行動しようと決める。

「……ソレイユ、困惑させて申し訳なかった。久々にナザリックに戻って来て戸惑っていたようだ。」

「そのような……もったいないお言葉。何より、戸惑われた原因は私にあるはずですよ。」

「いや、違うんだ。疑ってすまなかった。ソレイユ、君はかつて私がナザリックを離れる前の記憶のままであり、変わっていない。」

「……まさか、私のようなメイドの事を覚えていただいていたのですか……？」

「もちろん覚えている。君だってナザリック地下大墳墓の一員なのだから。」

「……もつたいない…ありがとうございます…!」

現実だと仮定して行動すると、先程から迷惑をかけたソレイユに謝らなければと考えて話す。主人格として扱ってくれているようなので、言葉遣いも少し気をつけながら。

ソレイユに落ち度が無かったと説明しようとする、覚えている事に対して驚いているようだったので、即答する。本心を語るに躊躇いなど無いのだから。

覚えている、一員だと言うと感極まったような表情を浮かべるソレイユに、嬉しくなる。

何年も訪れていなかった自分に、これほど好意を向けてくれているのだから。

「こちらこそありがとう。長い間ナザリックを離れていた私に、思う事もあるだろうに。」

「……そのようなことは!至らない事が多い私共を、見捨てずまた戻って来ていただいたのです!感謝意外に他意はございません!」

「……本当にありがとう、ソレイユ。——そうだ、私以外に仲間達……ナザリックを創ったメンバーはどこに居るのかな?」

「——はい!先程モモンガ様が10階層の方向へ向かっていらっしやったのをお見掛けいたしました!……他の至高の方々は、ヤスヒ口様を除いてお隠れになられたままだと思われます。」

「——そうか!なら名残惜しいけれど、一先ずモモンガさんに会って来なければ。ありがとう。」

「もつたいなきお言葉!ありがとうございます。いってらっしやいませ!」

本当に嬉しいことを言ってくれる。このまま話していたいという欲求を覚えつつも、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーがどこに居るのかを聞いてみる。するとログイン時にオンラインか確認したモ

モンガさんは居るようだ。お隠れというのはオフライン状態の事だろうか？と考えつつ、まずはモモンガさんに会いに行こう。そう考えてピシッと礼をとっているソレイユに背を向けて、10階層を指す。やはりモモンガさんは玉座の間に向かったのだろうか。

急いで玉座の間へと向かい、また幾つ目かの角を曲がったところに、10人以上が手を広げながら降りることも可能ぐらい巨大な階段へと出る。

そこに、丁度10階層から上って来た7人と出くわす。

先頭を歩くのはオーソドックスな執事服を着た老人で、髪と髭は完全に白く、すらりと伸びた姿勢は鋼でできた剣を髣髴とさせる。

ナザリックの家 ハウス・スチュワード 令の仕事までも行う執事 バトラー セバス・チャン

その執事の後ろに従う6人のメイド——と言っても先程会ったソレイユのようにただのメイドではなく、それぞれ銀や金、黒といった色の金属でできた手甲、足甲をはめ、動きやすそうな漫画のような鎧を身に着けている。それだけでは一見メイドには見えないだろうが、鎧が漠然とだが、メイド服をモチーフにしているんだらうなと気がつける作りになっている。そして頭にはホワイトブリム。加えて各員がそれぞれ違った種類の武器を所持している。

それぞれ

ユリ・アルファ

ルプスレギナ・ベータ

ナーベラル・ガンマ

シズ・デルタ

ソリュシヤン・イプシロン

エントマ・ヴァシリツサ・ゼータ

の6名だ。

皆、一様にこちらに気付いて驚いた顔をし、跪く。セバスとシズの二名は、表情の変化がわかりにくい。

「これは——ヤスヒロ様。」

「ヤスヒロ様！（様つす！）（…様）（様あ！）」

「——久しぶり、セバス、ユリ、ルプスレギナ、ナーベラル、シズ、ソリュシヤン、エントマ。長らくナザリックを留守にしてすまなかつた。」

「そのような事はございませんヤスヒロ様、無事なご帰還をお祝い申し上げます」

「我々一同、ヤスヒロ様のご帰還がなによりの吉報でございます！」

「…ありがとうございます。再び皆に会えた事を、私も非常に嬉しく思う。して、何故君達が9階層に？」

「ハッ、私とソリュシヤンがナザリック外へ。ユリ、ルプスレギナ、ナーベラル、シズ、エントマは9階層の守りに入れとのモモンガ様の命令により行動していた所でございます。」

「おお！ならばモモンガさんは玉座の間か？」

「左様でございます。モモンガ様は玉座の間におられます。」

懐かしさに目を細めつつ、忠誠と喜びを示してくれる執事とメイドについて相好を崩してしまう。

そして先程のソレイユだけではなく、セバスと6人の戦闘^ブメイド^ア達もまるで現実のように会話をを行い、行動している。

この世界が現実になった仮説の信頼性を上げつつ、本来玉座の間前の広間の守りにについている執事と戦闘^ブメイドが、全員で9階層に上がってきた事に疑問を覚えて問いかける。

するとモモンガさんの命令を受けての行動だという。

確認してみると、やはりモモンガさんは玉座の間に居るらしい。

「そうか！ならば私も帰還を告げにモモンガさんの所に行くとしてしよう。引き止めてすまなかった、任務を続けてくれ。」

「ハッ、かしこまりました！それでは失礼致します。」

敬意を示してくれる執事とメイドを見送りつつ、嬉しさ9割、今の

所上位者として扱って来てくれているんだな。という確認という打算で残りの1割を占めた。

そんな自分に少し嫌悪感を抱きつつ、やけに冷静に行動できるなあ、という疑問を感じる。もしかするとこの異形の体になっているせいで、精神になんらかの影響を受けているのかもしれない。

それでも悪い事ではないだろう、と考えて思考を切り替え、玉座の間へと再び進む。

10階層に降りてしばらく進むと、やがて半球状の大きなドーム型の大広間に到着した。

天井には4色のクリスタルが白色光を放ち、悪魔をかたどった彫像が67体置かれている。

勝手知ったるこの部屋——ソロモンレの小さな鍵トを横切り、5メートル以上はあるだろう巨大な両開きの扉まで到達する。

「……モモンガさん、帰ってきましたよ。」

この扉の先は玉座の間であり、かつての仲間、ギルド長のモモンガが居るはず。

こみ上げてくる懐かしさ、嬉しさから眩き、扉に触れるように手をかざすとゆっくりと扉が開く。

「——モモンガさん！お久しぶりです！」

扉が完全に開くまで待ちきれず、逸るように声をあげる。

少し前まで見えなかつたはずの玉座までの遠い距離も、まるで視覚が強化されているかのようにはつきりと捉える事が出来た。

そしてその視線の先には——守護者統括であるアルベドその奥には見覚えのある骸骨の姿。モモンガの姿を捉える。

「あ……っ……ふわあ……！……モモンガ様……ッ……」

「……えっ……ヤスヒロさん？」

——そして、その2名は恋人の如き距離で密着し、まるで情事を
行っている所であった。

再会

かつて上位ギルドの一角を占めていたアインズ・ウール・ゴウンのギルド長であるモモンガは、ユグドラシルの最終日を迎えていた。

過去の栄光と輝かしい時間の結晶が終わりを告げる——はずであつた。

しかし、玉座の間にて最後の瞬間を迎えるも、サーバーダウンによる強制排出は起こらず苛立ちと戸惑いを感じていると、皆で作り上げたナザリック地下大墳墓のNPC達が意思を持って動き出したのだ。

本来おこなえないはずのNPCとの会話が可能、コマンドワード以外による命令に反応する事を確認。更には表情の変化も起こっている(ゲームのユグドラシルではプログラムで組み上げなければ表情の変化は無い)。

謎の事態に直面し、付き従えさせていた執事^{セバス}と戦闘^{ブレアデス}メイドにそれぞれ周辺の探索、及び8階層から敵対的な人物がこないか警戒を命じ、行動させた。

仮想現実が現実になった可能性を感じつつ、現在会ったNPC達は忠誠を誓ってくれているようだが、忠誠が不変の物であるのか、未だ会っていないNPCの忠誠は向けられているのか、わからない事だらけだ。

——とにかく情報だ。

そう考え、この世界が現実かどうか確認する為に、モモンガ自身以外に唯一玉座の間に残ったアルベド——純白のドレスをまとった美しい女性であり、僅かに微笑を浮かべた顔は女神の如く、ドレスと正反対の艶やかな黒髪が腰の辺りまで届いている。

金色に輝く瞳、縦に割れた瞳孔、山羊を連想させる2本の角や黒く染まった天使の翼が腰から生えているが、絶世の美女という評価に陰りは無い。——へと視線を向ける。

視線を向けるとアルベドは優しい笑みを浮かべ、モモンガに問いか

けてくる。

「モモンガ様、私は如何いたしましたでしょうか？」

「ああ、そうだな……私の元まで来い。」

心の奥底から嬉しげな声をあげ、アルベドがにじり寄り、まるで抱きつかんばかりの距離まで近付く。嬉しそうなアルベドの反応を見て、モモンガは激しい後悔に襲われる。

ユグドラシルのサービス終了時間直前、玉座の間に控えていたアルベドの設定を読み直し、設定魔かつギャップ萌えのギルドメンバー、タブラス・スマラグディナが「ちなみに、ビッチである。」という設定にしていた事を気付き、悩んだ末に「モモンガを愛している。」という設定に書き換えたのだ。

——このアルベドの反応は、そのせいだ——タブラさんの作った設定を歪めてしまったのか。そう後悔に襲われていたが、漂ってくるアルベドの香りで意識を引き戻される。

「……っ」

「ん？」

手を伸ばしてアルベドに触れると、痛みをこらえるような表情を浮かべるアルベド。

——気持ち悪がられているのか？と悲しい気持ちになったが、モモンガの持つ特殊能力の中に、触れた相手へ負のダメージを与えるスキルがあつた事を思い出す。

——ユグドラシルというゲームでは、味方への同士討ちは起きないと設定されていたが、解禁されている可能性が高い。むしろそうあつてくれ。

モモンガはそう判断し、アルベドに話しかける。

「すまないな、負の接触ネガティブ・タッチを解除することを忘れていた。」

「お気になさらずに、モモンガ様。この程度のダメージはダメージではありません。それにモモンガ様でしたらどのような痛みも……例えば破瓜の痛みでも……きや！」

「……あ……うん……そうか……。だ、だが、すまなかつたな。」

可愛らしい悲鳴と共に照れたように頬に手を当てるアルベドに対して、視線をおもいつきり逸らしつつ、モモンガが所持する様々な常時発動能力の制御について思案し——その切り方を唐突に悟る。

思わず今の自分が置かれている異常な状況に、モモンガは笑った。これだけの異常事態が続けば慣れるというものだ。

「触るぞ」

「あっ」

能力を解除してから手を伸ばし、アルベドの手を触る。美女の手に触れ男として生まれた感情をモモンガは追いつまぬ。知りたかったのは手首の脈だ。

——脈と体温がある。

生物なら当たり前の事であり、モモンガは自らの手首を見返すが、それは肉も皮も無い真っ白な骨だ。血管が無いのだから、鼓動なんて感じない。モモンガの所持するクラスである死の支配者^{オーバーロード}はアンデット。死を超越した存在であり、あるわけがない。

視線を再びアルベドへ戻すと、濡れた目をしており、頬は紅潮して体温が急上昇している。

「……なんだこれは。」

これはNPC、単なるデータではないのか？それが本当に生きていくような——ユグドラシルというゲームが現実になったような——。

その考えがこびりついたように残る。ならば……最後の一手。これを確認すれば、すべての予感が確信に変わる。

いま自分が置かれた状況、現実と非現実の狭間から、その天秤がどちらかに傾く。

だから、これはしなくてはならないことだ。そう自分に言い聞かせる。

「アルベド……む、胸を触っても良いか？」

「えっ？」

アルベドが目をはちくりさせつつ、空気が凍る。

モモンガも言ってから、悶絶したい気分に襲われていた。仕方ないとはいえ、女性に向かって何を言っている。自分は最低だと叫びたい気分だった。

しかし仕方が無い。そう、これは必要な事だと自分に強く言い聞かせ、所持するスキルによる影響で精神の安定を高速で取り戻したモモンガは、上位者としての威厳を精一杯に込めて重ねて言う。

「構わにや……ないな？」

全然無理でした。

そんなモモンガのおどおどとした言葉に、アルベドは花が咲いたような輝きを持って、微笑みかける。

「もちろんです、モモンガ様。どうぞ好きにして下さい。」

アルベドが更に一步踏み出し、吐息のかかる距離でぐつと胸を張る。豊かな双胸がモモンガの前に突き出された。

異様な緊張と同様の反面、頭の片隅では妙に冷静な自分が自らの姿を客観的に観察していた。

モモンガは自分が馬鹿のような気がしてたまらなかった。なぜこんな手段を思いつき、実行に移そうと考えたのか。

しかし、これがユグドラシルの世界ならば胸を触る行う行為は18禁に触れる行為であり、厳禁だ。ならば触れる事が出来る場合はこの世界が現実という可能性がぐつと高くなる。

そう自らを納得させ、目をキラキラとさせながら、さあどうぞといわんばかりに胸を何度も突き出すアルベドへと意を決して手を伸ばす。

「——あつ……ッ」

……触れた。モモンガの骨の手には柔らかいものが形を変える感じが伝わる。

無意識に手はアルベドの胸を揉んだままで、思考を巡らせる。

——やはり現実。そう考えを巡らせていたため、玉座の間の扉が開く事を意識の外に置いてしまった。

「——モモンガさん！お久しぶりです！」

「あ……っ……ふわあ……！……モモンガ様……ッ……」

アルベドの濡れた声とほぼ同時に、かつて何度も聞き、大切な友人の一人である声が聞こえた気がする。

「……え？……ヤスヒロさん？」

その声の主を極僅かな逡巡をもって思い出し、呆然と声を出す。

聞こえた声に向かって視線を巡らすと、そこには見覚えのある姿が目に入る。

「…………や、ヤスヒロさ——」

「……あ、お邪魔しました。どうぞごゆっくり。」

感動に震えながら声をかけようとすると、かつての友はゆっくりと閉まる扉へと消えていった。

「……は？」

「モモンガ様……ヤスヒロ様もあ言っておられる事ですし、どうぞお続きを。ああ……ここで私は初めてを迎えるのですね……！」

友の反応に呆然としてみると、アルベドが紡いだ言葉が脳に染み込み、ようやく思考が戻る。

「よ、よせ！よすのだ、アルベド。」

「は？ 畏まりました。」

「今はそのような……というか、そういうことをしている場合ではない！」

「も、申し訳ありません！至高の御方が戻られたという時に、己が欲望を優先させてしまい」

ぱつと飛びのき、ひれ伏すアルベドを視界に入れながら、モモンガは慌てて扉まで走る——

ヤスヒロが玉座の間を開いた瞬間目に入って来たのは、それぞれの階層に存在する階層守護者、及び階層の一部領域を守護する領域守護者、その各名を統率する守護者統括のアルベド。そしてアルベドに覆いかぶされるようにしているギルド長、モモンガであった。

「……あ、お邪魔しました。どうぞごゆっくり。」

まるで情事を行っているかの如き距離で密着している2人を認識し、慌てて扉を閉める。

「……………」

眼前で閉まった扉を見つめつつ、今の状況を再び思い返す。

「……ヤバイヤバイヤバイ、滅茶苦茶タイミング悪いんですけど…。」
「……でも、ペロロンチーノさんならともかく、モモンガさんがああいう事をしているというのは意外だ……。」

久々の再開が情事を目撃という状況に頭を痛めつつ、モモンガが同じ状況に巻き込まれていたとしたら、今の光景は意外であった。とりあえず少し時間を空けて来るかと踵を返そうとした所で、再び扉が開く。

「ヤスヒロさん！いらっしやってたんですね！」

「……あー、モモンガさん、お久しぶりです。……あの、後でも大丈夫ですのよ。」

「ちよ……今のは違って……あー！違わないのか？いや、とにかく大

丈夫ですから！」

「……そうですか？……本当にお久しぶりです、モモンガさん。」

「本当に……本当にお久しぶりです、ヤスヒロさん！」

勢い良く扉が開き、モモンガが姿を現す。

先程見てしまった光景と気まぐさから少しギクシヤクしてしまっただが、無かった事にしたのかなと判断し、ひとまずは意識からどける。

タイミングは悪かったが、この異常事態に一人ではなくモモンガもいるという事に安堵を覚えつつ、再開を喜ぶ。

「3年ぶりですからね……またお会いできて本当に良かったです。招待メールを拝見したのですが、ログインが遅くなって申し訳ありませんでした。」

「……もうそんなに経つんですね。来て頂いただけで十分ですよ！私も、どうやら入れ違いにここへ来てしまったようで申し訳ない。」

「……なんだか、久々にお会いしたのにお互い謝るといいうのも変な話ですね。」

「そうですね……せっかくの再開なんですから、ここではなく中に入りますしょう。」

お互いに謝るといいう状況におかしくなり、少し笑いながらモモンガの招きで玉座の間へと入る。先程は意表をつかれた出来事によく見ていなかったが、そこには数百人が入ってもなお余るような広さであり、壁、天井に至るまで全て幻想的な細工が施されている。

左右の壁にはアインズ・ウール・ゴウンのメンバーを示す41枚の大きな旗が垂れ下がり、部屋の最奥には巨大な水晶を切り出されたような玉座、ギルドサインが示された真紅の巨大な布がかけられている。

「……本当に、変わっていない。そして、戻ってこれたんですね——」。

アインズに並び、玉座へと向かいながら感嘆と懐かしさに言葉を漏らすヤスヒロを、モモンガは嬉しそうに横目で見る。

皆で作り上げたナザリック地下大墳墓、それが自分一人だけが輝いて見える過去の遺物などではない事を感じて。

「——お帰りなさいませ、ヤスヒロ様。ナザリック一同を代表し、ご帰還をお喜び申し上げます。」

「——ありがとうございます、アルベド。帰還が遅くなってすまなかった。あー……それと先程はタイミングも悪かった、すまない。顔を上げてくれ」

玉座の下へと進むと、玉座のすぐ脇で平伏しているアルベドから声がかかる。

玉座の間へ入ってすぐに視界に入っていたのだが、先程の気まずさからどう対応すれば良いか悩んでいたが、アルベドから声がかかったので意を決して言葉を返す。

ヤスヒロの声に従って上げたアルベドの顔は記憶にあるままの美しい姿をしているが、目を合わせず視線を伏せているのが少し怖い。いくらビッチ設定のアルベドでも、やはり先程の出来事は気分の良い物ではなかったのだろうか。

「……いえ、至高の御方々が何かを行う際に、私共にご遠慮なさる事など一切ございません。」

アルベドは視線を上げ、自分とモモンガさんを見ながら微笑を向ける。完璧な美しい笑顔を見て、視線をすぐに上げなかったのは照れていたのかな？と判断する。

「……オホンー……アルベド、お前の忠義に感謝する。……早速だがお前に命令する事がある。」

「感謝など……至高の御方に忠義を尽くす事は当然の事です！何より私の愛しいお方からのご命、なんなりとお命じくくださいー！」

「……各階層の守護者に連絡を取れ、6階層のアンフィテアトルムまで来るように伝えよ。時間は今から1時間半後。それからアウラとマーレには我々から伝えるので必要は無い。」

「畏まりました、復唱いたします。6階層守護者を除き、各階層守護者に今より1時間半後に6階層のアンフィテアトルムまで来るように伝えます。」

「よし、行け。」

「はっ」

そんな事を考えていると、モモンガさんがアルベドに命令を下す。命令自体は何か考えがあるんだろうな、と思ったのだが、アルベドから放たれた「愛しいお方」という発言に、先程の情事を見ているも驚きは拭えない。

アルベドが退室した事を確認しつつ、モモンガへと声をかける。

「——色々と確認したい事がありますが、やはりNPCにはなんとなく口調を変えてしまいますね。……ところで、ビッチ設定のアルベドにあそこまで言わせるとは、この短時間に何があったんですか？モモンガさん。……もしかして、私の居ない間にタブラさんが設定を変えていたんですか？」

「……………」

聞くか聞かないでおくべきか少し悩みつつ、好奇心に勝てずアルベドについてモモンガに問いかける。するとモモンガは少しよろめいたように玉座へと手をかけ、うなだれる。

「……だ、大丈夫ですか。あの、聞いて不味かったならこの話は無かった事に——」

「……………いえ……………ヤスヒロさん、私は大変な事をしてしまいました……………」

アルベドの設定

「……ビツチの所をモモンガを愛している、ですか。」

「……そうなんです。まさかこんな事になるとは……」

モモンガによると、「ちなみにビツチである。」の設定をサービス終了時にビツチは可哀想だと書き換えたらしい。

書き換えた内容が「モモンガを愛している。」というのは冗談半分なのだろうが。

「……まあ、いいんじゃないですか？」

「ええっ……しかし……タブラさんが作った設定を歪めてしまったんですよ?」

「うーん……タブラさんがどう思われるかは別ですが、私は良いと思いますよ。タブラさんがこちらに来られていたら考えましようよ。それに……前の設定のアルベド、ちよつと苦手だったんですよ……」

「……苦手?今ではなく前のアルベドをですか?」

苦悩しているモモンガを見つつ、アルベドの設定について思いを馳せる。

タブラさんには申し訳ないが、私はモモンガさん同様ビツチというのは可哀想だ。

これには個人的な思い出も影響しているのだが。

「……覚えていらつしやいますかね?昔お話した元彼女の話。」

「……………あー……なるほど……あの件があるんですけどか。」

「ええ、だから以前のアルベドの設定はあまり好きではなかったんですよ。……シャルティアは平気なんですが。」

かつてユグドラシルでクリスマスマスを過ごした際、男性独身メンバーで女性遍歴の暴露会があったのだ。

その時に初めて最後の彼女の話をした事がある。手を出していないのに自分の子供を妊娠したという彼女の話を。

その彼女に、アルベドはなんとなく雰囲気似ているのだ。清純そうで微笑を絶やさない割には、腹に一物を抱えていそうな所が。

その思い出からどうも苦手だったのだ。どうも腹黒さを持っているビッチというのはそれを思い出してしまうから。

「ですけど、先程の反応からも書き換えた設定が生きていて、モモンガさんへの好意が感じられました。私は先程のアルベドなら以前より好きになれそうです。」

「……そうですか。……なら一先ずはいいのかな?……うーん……」

「まあ他のメンバーもこちらに来ていたら、その時また考えましようよ。それより、1時間半後にアンファイテアトルムに集まるように言っていました。何か考えがあったのでは?」

設定書き換えを気にしていないとモモンガに伝えるも、モモンガはまだ腑に落ちないようだ。

後はモモンガさんの気持ち次第だし、仕方ないかと考え、先程命令を下していたアンファイテアトルムに集合の件を尋ねる。

「ああ……あれはまず階層守護者からの忠誠があるかを確認するのと、我々の能力がユグドラシル通り維持されているのか確認しようかと思ひまして。」

「……なるほど、身の安全というわけですね。とすると順序的に自我の乏しいであろうゴーレム系のレメゲトンの確認からですかね……。それに気にしていませんでしたが、魔法や身体能力がユグドラシルから変化していると厄介です。」

「ヤスヒロさんはまだマシですが、私は魔法が使えないと一気に能力が落ちますからね……。と、その前に。……今のこの世界を、どう思

いますか？現実なのか夢なのか……。」

「……私は現実だと考えています。モモンガさんはどうですか？」

モモンガに言われて能力について思い至る。

NPC達が意思を持った事、戻ってこれた事でそこまで考えていなかったのだ。

確かに能力が無くなっていては、今後の活動に支障をきたしてしまおうだろう。

今が現実だと思うかという問いには、肯定で返す。これに関しては、現実だと思うしかないかと開き直っているのだが。

「私も……現実になったのではないかと考えています。自由な表情の変化、触覚、体温、脈、18禁行為の可能。ゲームのユグドラシルではあり得なかった事です。」

「あ……ナルホド、ソウデスネ。ならこの世界が夢や妄想でない事を祈るのみです。」

「……違いますからね？あくまでアルベドにした行為は確認の為ですからね？……ゴホン！それよりよろしいのですか？リアルの方は。かなり良い所で働いていらっしやいましたし、戻りたくはないのですか？」

「ん……ああ！そういう事ですか。なるほどなるほど。リアルの方は……全く無いといえば嘘になりますが……それほどは。あ、それに辞めた所なんですよ。ですからまあ、こんな事になるとわかっていれば、退職金を課金に使っておけば良かったなとは思いますが。」

「……え？そうなんですか？という事は退職して日本に戻って来られたんですか？」

「いえいえ、一応戻ってから辞めました。実は——」

確かに先程のモモンガさんとアルベドの行為は、ユグドラシルだったらアカウント停止処分は現実だよなあ。

愛していると設定を変えてからの行為だったので、本当に確認だけ？と、からかってみようかという考えがよぎるが、設定変更を後悔し

ている本人がそう言っている以上無粋かと考えて流しておく。

職場を辞めたというとモモンガさんが驚いているので、今までの経緯を話す。

「……は!? そういえばクーデターはニュースになってましたけど、巻き込まれてたんですか!？」

「はい。……ほんと、死ぬかと思いました。この時代に機械手術ではなく人による手術だったんですから。」

「……うわー……そうだったんですね。本当に、無事で良かったです。」

「ありがとうございます。まあ今となっては、お陰でこの現実化? までに間に合ったと考えれば良かったです。……戻ってきたらサービス終了していたと考えると、ゾツとする。」

「……ありがとうございます、ヤスヒロさん。私も一人で転移していたらと考えると、胃が痛くなりますよ。……胃、無いですけど。」

クーデターに巻き込まれた件を話すと、モモンガさんは骨の姿でもわかるぐらい驚く。どの国に行くとは正確に伝えていなかった事もあり、知らなかったのだろう。

言っていたら心配をかけていただろうし、良かったと考えながら笑いあう。

「ハハツ、確かに。私はまだ変化が少ないといえませんが、モモンガさんは骨だけですもんね。」

「ですね……確かに角や翼、青白い肌はあっても肉体がありますし。」「皆には異形度が足りないとよく言われましたが、こういう時には変化が少なくて助かります。……つと、あまり長話をしていたらすぐ時間ですね、話はまた後でという事で行動に移りますか。」

「現実化なんて起こると思いませんよ……。ですね、早めに着いて戦闘能力も確かめたいですし。」

モモンガは皮と肉が無くなり、オーバーロードである骨の姿になっているが、ヤスヒロの飛天夜叉は、異形種に分類されている中ではかなり人間寄りの姿をしている。人間の時と比べて一番違う感覚は翼であるが、飛行していない現状ではユグドラシルの時の操作とあまり変わらない感じがする。

飛行もそのうち確かめないと、と考えつつ、あまり長い間話し込むと守護者の招集時間に間に合わなくなると考え、行動を起こす。

「……モモンガさん、不謹慎かもしれませんが本当に楽しみです。ああ、戻って来れて良かった——」

ヤスヒロはそう言って歩き出す。顔には歓喜を浮かべながら——

闇妖精の双子

「戻れ、レメゲトンの悪魔たちよ。」

モモンガの言葉に従い、超稀少鉱石で作り出された67体のゴーレムたちは体躯の割には軽い足取りで、己の席へと戻り警戒姿勢を取る。

「……一先ず、身の安全は確保出来ましたね。」

「ええ、これでいざとなってもなんとかなるでしょう。」以後、私とヤスヒロさんの命令のみに従え。」

佩剣の柄から手を放しつつ、モモンガと自らの体を再度確認する。

「……魔法も使えたのもありがたいです。ステータスバーが無いので正確な確認は出来ていませんが、体感的にはMPの回復も出来ているようです。」

「ですね……後で攻撃魔法も確認しましょう。それが以前通りのダメージなら確実でしょう。」

モモンガとヤスヒロは自らに纏っているエフェクトを確認し、互いに頷きあう。レメゲトンの起動に先立ち念の為防御魔法を発動しようを意識した所、どのようになれば発動するか、魔法の効果、範囲、次の魔法の発動までどの程度時間がかかるかも、まるでド忘れしていた事を思い出すかのように理解出来たのだ。

そしてお互い防御魔法を複数発動、それほどの減少ではないがMPが減るという間隔を掴んだ。

ヤスヒロの使う——ある特殊な条件によって習得出来る魔法《コンティニアス・マジックヒール／継続的MP回復強化》により、2人のMPはほぼ回復している。ユグドラシルにおいて、MP回復ポーション等の便利なアイテムは存在しない為、MP譲渡や自然回復を除き、数少ないMP回復手段の一つである。

「しかしモモンガさん……フレンドリイファイアが解禁されているのは厄介ですね。これがなければ安心感も違うのですが。」

「……NPC達にも影響があると考えると、我々に従っているかは確認しなくてははいけませんね。」

「——皆で作り上げたNPCに期待……信じて、まずは目先の事を解決しましょう。」

特に確認しようとしたわけではなく偶然の産物なのだが、レメゲトンの起動確認の際に、味方以外に発動する妨害魔法である〈妨害空間・敵性行動遅延〉（ジャミングフィールド・デレイ・エネミー）を発動した際、モモンガにも影響が発生した為、まさかと思ひ他の魔法でも確認してみると、フレンドリイファイアが解禁されている事が確認出来た。

スキル等の範囲は意識すれば指定した対象を範囲外に出来たのだが、意図しない巻き込みが生じないように注意しなければならない事、ナザリック所属のNPCに対する不安感が若干上がってしまった事にため息をつく。

とはいえ他のNPCにも会ってみて、忠誠を誓ってくれていれば問題無いだろう。そう考えて他の確認作業を続ける。

「アイテムは……うお！つと、成功です。モモンガさん、アイテムボックスを開くことを思い浮かべながら手を動かしてみてください。」

「手が途中から消えていますけど……なるほど、こういう事ですか。」

所持アイテムを確認する為ユグドラシルと同じように中空に手を伸ばすと、空間に手が沈みこむように入り込み、窓のようなものが開く。そこにはいくつものアイテムが綺麗に並んでいた。手を動かし、アイテム画面ともいえるべきものをスクロールさせると、巻物、短杖、武器、防具、装飾品、宝石、ポーション等、様々な種類かつ膨大な数が表示され、アイテムボックスに入っていたアイテムも維持出来ている事に安堵を浮かべる。

「……消費アイテムをもったいなくて使わない性格で良かったです。」

「ヤスヒロさんはどうですか？」

「私は結構使う派でしたけど……戦闘スタイル的にアイテムは必須でしたので、消費アイテムはほぼフルスタックです。補充をしてからログアウトをしていて助かりましたよ。……私室のアイテムチェストも維持出来ていたらもう少し増えますが、一先ずは所持分で十分ですね。」

ヤスヒロは、魔法剣士という構想で構成されたビルドをしている。ユグドラシルでは基本的に魔法剣士は中途半端になってしまい、弱いとされている。それを補うために大量の課金を行い、モモンガの全身神器級アイテムには劣るが、ほぼ全ての装備を神器級で揃え、更には大量の補助アイテムを所持している。そして、魔法構成は強化と弱魔法に主体を置いており、複数対複数では純粹な支援メンバーに劣るものの、1：1の戦闘ならば上位に位置する戦闘力を得ている。

その構成から、消費アイテムは常に大量に保持しているようにしていたのだ。

「チェストが無事なら宝物殿にもあるはずですね……いざという時には取りに行きましょう。」

「ええ……そうですね。その時はお願ひします、リーダー。では、そろそろ移動しなければならぬでしょうが——」

「リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンですね。これも確認しておかないといけませんね……。」

モモンガ、ヤスヒロ共に自らの指を見つめる。正確にはモモンガは9、ヤスヒロは10個装備している一つ、ギルドエンブレムが刻印されている指輪を見つめる。

アインズ・ウール・ゴウンのメンバー全員が保有していたマジックアイテムであり、ナザリック地下大墳墓内の名前のついている部屋であれば、一部を除いて回数無制限に自在に転移できるというものである。

「先に私が転移して確認してきますね。リスク分散の為にはそれがベ

ストでしよう。」

「いえ、それなら私が行きます。ヤスヒロさんはここで待っていて下さい。」

「いや……モモンガさんと違い、私は3年ぶりですからね。今まで会ったNPC達は覚えてくれますが、覚えていないNPCが居る可能性を考えると、何かあつた時の為に残るのはモモンガさんにして下さい。」

「……それなら、転移先でNPCと遭遇する事を考えたら一緒じゃないですか？それなら私が行きます。」

「いや私が」

「いやいや私の方が。」

「——ぷっ。」

「ぷっ……アハハハッ」

お互い譲りあっている事が可笑しくなり、笑いあう。

アインズ・ウール・ゴウン全盛期の時も、こんな会話をしていたなあと思いつつながら。

「……なら、一緒に行きましょう。今までの確認も大丈夫でしたし、転移も従来通りの可能性が高いと思います。」

「……そうですね、では行きますか。」

少し笑った後に落ち着き、同時に転移を行う。

「転移！アンファイテアトルム！」

タイミングを合わせる為に転移を声に出して行い——瞬くように視界が黒く染まる。

そして——先程までの光景は一変し、周囲は薄暗い通路へと変貌していた。通路の先には巨大な格子戸が落ちており、隙間からは人工的な明かりが入り込んでいる。

「無事……のようですね、モモンガさん。」

「ええ、きちんと転移も発動していますね。」

転移の成功に安堵しつつ、2人は広く高い通路を巨大な格子戸に向かって今後の打ち合わせを軽く行いながら歩く。格子戸に近寄ると、青臭さと大地の匂い——深い森の匂いが鼻腔をくすぐる。

仮想現実では働かない嗅覚が働いている事に、モモンガと顔を見合わせる。

「……匂いますか？モモンガさん」

「ええ……ですが、肺も気道も無い体なのに、呼吸が出来るというのも変な感じがします。」

「ああ……そういえば。……わかりませんね。大体魔法のせいという事にしておきますか？」

「まあ害はないでしょうし……。そうしておきます。」

肉体のあるヤスヒロと違い、モモンガは骨の体をしている。それなのに何故匂いを感じるのかという疑問が湧き出る。

しかし考えてもわからない事なので、一旦考えることを放棄し、歩みを進める。

格子戸までやってくると、2人の接近に合わせ、自動ドアを思わせる完璧なタイミングで勢い良く上に持ち上がった。格子戸を潜り抜けた先には、

何層にもなる客席が中央の空間を取り囲む場所——コロッセウム 円形闘技場

長径188メートル、短径156メートルの楕円形で、高さは48メートル。ローマ帝政期に作られたコロッセウムを基に造っている。様々な箇所にく<永続光>の魔法が掛かり、その白い光を周囲に放っている為、真昼の如く周囲が見渡せる。

この場所につけられた名前はアンフィテートルム 円形劇場。

無数の客席には数多くのゴーレムが配置されており、多くの侵略者はここで最期を遂げた。

2人は闘技場の中央に歩を進めながら、自然と空を眺める。

そこには真っ黒な夜空が浮かんでいるが、周囲の光が無ければ無数

の星空が見えた事だろう。

この場所はナザリツクの第6階層。地中に存在する以上天空に浮かんでいるのは偽りの空だ。しかし、かなりのデータを割り振っており、作成したメンバーがこだわりを持って作成した為、時間の経過と共に変化するし日光と同じ働きを持つ太陽すら浮かぶ。

「……うわあ、ここに來るのも3年ぶりだ。めっちゃくちや懐かしいですよ。」

「私も……そこそこ來てませんでしたね。こうしてしつかり見直す、やっぱりブルー・プラネットさんの作りこみはすごいです。」

「リアルの空ではこうはいきませんからね——」

「……あ、あああああああ!!」

闘技場の中央まで歩いた所で景色を見渡し、モモンガと話をしていると、上の方から叫び声が聞こえる。

何事かと声がした方へと視線を向けると、闘技場6階にある貴賓席から跳躍する姿が目に入る。

6階から飛び降りた影は、空中で一回転すると翼でも生えているような軽やかさで大地に舞い降りる。足を軽く曲げるだけで衝撃を完全に受け殺したその影は、喜色を浮かべた表情で駆け出す。

飛び降りて來たのは10歳ほどの子供。太陽のような、という形容詞が相応しい笑顔をその顔に浮かべている。金の絹のような髪は肩口で切りそろえられており、森と海という左右違う瞳が、表情と相まって子犬のように煌いている。

耳は長く尖っており、薄黒い肌。森妖精の近親種、闇妖精ダークエルフと言われる種族だ。上下共に纏った軽装鎧には赤黒い竜王鱗が貼り付けられており、その上に羽織った白地に金糸の入ったベストの胸部分には、アインズ・ウール・ゴウンのギルドサイン。

大きな黄金色に輝いたネックレスや、魔法金属のプレートが付けられた手袋で身を包んでいる。

腰、右肩にそれぞれ鞭を束ね、背中には異様な装飾がつけられた弓

を背負っていた。

「——アウラ。」

ヤスヒロは登場した闇妖精の子供の名前を呟く。

ナザリック地下大墳墓第6階層の守護者であり、幻獣や魔獣等を使役する魔獣使い兼野伏^{レンジャー}——アウラ・ベラ・フィオーラ

アウラは勢いよくヤスヒロとモモンガに近づいてくる。小さい体とは思えないスピードで、瞬時に距離が近づく。

アウラは足で急ブレーキ。

緋^ひ色^{いろ}金^か合^あ金^ね板^いを^た上^う面^めには^め込^こんだ^ど運^{うん}動^{どう}靴^{くつ}が、^ざザ^ざと^お大^{だい}地^ちを^を削^けり^し土^{つち}煙^{えん}を^を起^おこ^こす。ヤスヒロとモモンガまで土煙が届かないように計算しているなら見事なものだ。

「——ヤスヒロ様、お帰りなさいませ！帰還をお喜び申し上げます！モモンガ様、ヤスヒロ様、あたしの守護階層あたしの守護階層までようこそ！」

ここに来るまでに出会ったNPCに比べると敬服というよりは親しみが強い挨拶だが、尻尾を振っているような映像が幻視出来るほど喜色を浮かべた顔を見ると、強い喜びが心に浮かぶ。

その甘美な感情はすぐに弱くなってしまったが、どうも精神的な動揺がこの体になってから抑えられている気がする。しかしその究明は一先ず置いておく。

「——ありがとう、アウラ。また会えて私も嬉しいよ。」

そう言いながらアウラの頭に思わず手を伸ばし、撫でる。

アウラは一瞬ビクツとしたが嫌がる素振りもなく、喜色を浮かべているので撫で続ける。絹糸のようなさらさらとした感触が心地よい。

このままずっと撫でていたいという気分になるが、隣からモモンガのゴホン、という声に呼び戻され、頭から手をどける。

「アウラの守護階層に少しばかり邪魔をさせてもらうぞ。」

「何を言うんですかー。モモンガ様とヤスヒロ様はナザリック地下大墳墓の主人、絶対の支配者ですよ？その御方々がどこかをお訪ねになつて邪魔者扱いされるはずがないですよー」

「そういうものか？……とところでアウラはここにいたみたいだが……」

「マーレは今どこかに？」

モモンガとヤスヒロの言葉に、アウラがぐるっと振り返つて飛び降りてきた貴賓席を睨み、大きな声をあげる。

「モモンガ様とヤスヒロ様が来てるんだよ！早く来なさいよ！失礼でしよー！」

その声につられて貴賓席へ視線を向けると、何かがびよこびよこ動いているのが確認できた。

「ああ……この感覚は気配だったのか。という事はあそこにマーレも居たんだね。」

「はい。そうです、ヤスヒロ様。あの子ったら弱虫なんだから……とつと飛び降りなさいよ！」

「む、無理だよお……お姉ちゃん……」

アウラの声に、消え入るような声が返ってくる。貴賓席との距離を考えれば聞こえないはずだが、実のところはアウラが装備するネットワークスの魔法的な働きによるものだ。

はあ、とアウラはため息をつくと、頭を抱える。

「あ、あのモモンガ様、ヤスヒロ様。あの子はちよつと臆病なんです。わざとこのような失礼な態度をとっているわけじゃないんです。」

「ああ、わかっているさ。ねえ、モモンガさん。」

「無論、了解しているともアウラ。私達はお前たちの忠義を疑った事など、一度も無い。」

マーレの設定から臆病というのはわかっているし、社会人たるもの

本音と建前は重要である。つい先程、ここに来るまでに疑った罪悪感にチクチクと苛まれつつ、ヤスヒロとモモンガは大きく頷くと、安心させるように優しく答えを返した。

見るからにほっとした様子のアウラだったが、すぐさま貴賓席から階段へと向かっている人物へ怒りの表情を向けた。

「ナザリック絶対支配者であるお二人がいらっしやっっているのに、すぐに階層守護者が出迎えられないなんてどれだけ最低なのか、あんただって分かるでしょうが！もし怖くて降りられないなんて言うなら、勇気の代わりにあたしの蹴りを代用するからね！」

「う、うう……わ、分かったよお……え、えいー！」

気合を入れたにしては抜けたような声と共に、ぴよこんと飛び降りる。

マールは両足で着地すると、よろよろとよろめく。先程のアウラとは雲泥の差だが、それでも落下によるダメージは様子は無い。

それからテツテツテという擬音が似合いそうな速度で走ってくる。当然本気で走っているのだろうが、アウラと比べると襲い。同じことを思ったであろうアウラの眉間がピキピキと痙攣してマールを急かす。

そんな表情豊かな二人の様子を見ながら、ヤスヒロとモモンガは目を細める。

「こんなに表情豊かなマールとアウラを……茶釜さんにも見て貰いたいですね。」

「——ええ、これが茶釜さんの本当に望んだ、マールとアウラなのでしよう。」

ぶくぶく茶釜。二人の闇妖精を設定したギルドメンバー。

彼女にもこの光景を見せたい。見せてやりたかった。

微妙に違うが、似たような考えを抱きながらマールを待つ。

少しだけ到着を待って、現れたのはアウラとそっくりな子供。髪

色や長さ、瞳の色、顔の造形、双子以外の何物でもない。ただ、アウラを太陽と例えるならば、マールは月の輝きだ。

オドオドとし、今にも怒られるのではないかと身構えて上目遣いをする子供。

青というよりは藍色の竜王鱗で出来た胴鎧、そして深い緑色をした、まるで森の葉のような短めのマントを羽織っている。

アウラと同じような白色が主な服装だが、やや短めのスカートに白色のストッキング、ネックレスはアウラのものに酷似した銀色のドングリ、絹のような光沢をもつ白い手袋をした手にねじれた黒い木の杖を握っている。

マール・ベロ・フィオーレ

アウラと同じくナザリック地下大墳墓第六階層のもう一人の守護者だ。

アウラとマールが二人揃ってペコリと頭を下げた所で、声をかける。

「二人とも、元気そうでなによりだ。」

「長らく留守にして申し訳ない。そして久しぶり、アウラ、マール。」

「はい！元氣ですよー。このごろ侵入者が居なくて暇でしたが、ヤスヒロ様が戻って来てくれて嬉しいですよ！」

「お、お帰りなさいませ、ヤスヒロ様……。ふ、再び姿を現して頂いて……。嬉しいです。……。し、侵入者は会いたくないけど……。こ、こわいもの。」

ニコニコとしていたアウラの表情が、マールの後半の言葉に合わせて無表情へと変化する。

「……はあ。モモンガ様、ヤスヒロ様、ちよつと失礼します。」

「い、いたいよ。お、お姉ちゃん、痛いよお。」

モモンガとヤスヒロが軽く頷くと、マールの耳を摘まんでアウラが少し離れる。そこで遠目でもアウラがマールを叱責していることが分かる。

「……侵入者か。私もマーレと同じで会いたくはないですね……。」
「……プレイヤー超絶が居なければいいのですが。もしくは他のプレイヤーが多ければ厄介ですね。我々は嫌われているギルドでしたから」

正確な能力の把握、敵対勢力の把握、ナザリックの掌握、せめてそれらが済んでからにして欲しいとモモンガとヤスヒロが話していると、気付けばマーレは正座させられながら、アウラに叱られている。

「……モモンガさん、なんだかあの二人を見ていると茶釜さんとペロロンチーノさんを思い出しますね。」

「マーレはペロロンチーノさんが作ったわけじゃないんですがね……茶釜さんには『姉には従うべし。』という思いがあったのかもしれない。——しかし、考えてみるとアウラもマーレも一度死んだはずですが、その事はどうなっているんでしょう?」

「……復活も有効。と考えたいですね、願望も含めて。しかし、確かめるのは——今は止めておきましょう。恐怖の記憶だという可能性を考えて、アフターフォローが出来る時に聞くべきでしょう。」

かつて1500人も大群が攻めて来た際に、8階層まで侵入された。つまりアウラとマーレは死亡したのだが、そのときの記憶はどうなっているのだろう。死という概念は現在の二人にどのような意味合いを持つのか。確かめたい気持ちもあるが、無理に藪をつつく必要も無い。なにより恐怖の記憶だった場合、掘り返したくないという考えを抱きながら。

そんな事を考えている間も、アウラの説教は続いていた。

そろそろ止めるか——可愛い姉弟喧嘩のようなものだし、眺めていてもいいのだが——姉弟喧嘩にしては一方的になっているし、マーレも別にそれほどおかしな事は言っていない。

「あー……アウラ、それぐらいにしてあげてはどうかかな?」

「ヤスヒロ様！で、ですがマールも守護者として——」

「——問題ないよ、アウラ。アウラの気持ちは嬉しい。階層守護者としての地位にあるマールが臆するような言葉を、私達の前で発するというのが不味いという気持ちも。しかし、マールの性格も把握した上で、我々はマールを守護者に据えているんだ。」

「ヤスヒロさんの言うとおりで。それに私達はアウラもマールもこのナザリック地下大墳墓に何者かが攻めてきたときには、勇気を持って、死を恐れずに戦ってくれると信じているとも。すべき時にすべき事をするのであれば、さほど叱る必要もなからう。」

「……はい！もちろんです！ありがとうございます、モモンガ様！ヤスヒロ様！」

「あ、ありがとうございます。」

ヤスヒロとモモンガでアウラのお説教にストップをかける。一言では止まらないが、言い募ると深いお辞儀と礼と共に、キラキラとした目で見つめてくる。そんな尊敬の空気を変える為に、正座したままのマールに近付いて手を貸して立ち上がらせる。

「ところでアウラ、マール。今日ここに来たのは訓練する為なのだ、この闘技場を貸して貰うぞ。」

「訓練？え？モモンガ様が!？」

モモンガがここに来た理由を二人に伝えると、二人の目が転がり落ちんばかりに見開かれる。最高位の魔法詠唱者と魔法剣士であり、このナザリック地下大墳墓を支配し、あらゆる者達の頂点に君臨する存在が何を言っているのかという驚きがあった。

「そうだ、ヤスヒロさんもな。それと色々な実験を兼ねている。」

簡素な返事と共にモモンガがスタッフを地面に軽く叩きつけるのを見て、二人の表情に理解の表情が浮かぶ。

「あ、あ、あの、そ、それがあの最高位武器、モモンガ様しか触ることを許されないという伝説のアレですか？」

伝説のアレとはどんな風な意味なんだろう。モモンガとヤスヒロはそんな疑問を覚えるが、マールレの瞳の輝きを見れば、それが悪い意味ではないことは察知できる。

「その通りだとも。あれがアインズ・ウール・ゴウン全員で作り上げた最高位のギルド武器、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンだよ、マールレ。」

ヤスヒロの言葉にモモンガが自慢気にスタッフを掲げると、スタッフが周囲の光を反射して見事なまでに美しく輝く。ただ、問題は禍々しい黒の揺らめきも同時に放っているため、邪悪な雰囲気しか無いことだが。

「スタッフの七匹の蛇が啜える宝石はそれぞれが神器級アーティファクト。シリーズアイテムであるために、すべてを揃えることにより強大な力が引き出されている。これらをすべて集めるには――」

スタッフについて語り始めたモモンガ、きらきらとした目でその話を食い入るように聞くアウラとマールレを見つめながら、微笑ましい気持ちを抱く。今までは何かを語ってもプログラミングした会話でない限り反応しなかったNPC達が、こうも表情豊かに話を聞いているのだから。

――しかし、かつてNPC達に話しかけていた内容は覚えているのだろうか？ふとそんな事を考える。変な事は言っていないはずだが――

「――特に凄いのは組み込まれた自動迎撃システム……ゴホン」

スタッフの解説を横目にそんな事を考えていると、上の空になっていた事に気付いたのか、モモンガさんがスタッフ解説を中断する。

「まあなんだ、そんなわけだ。」

「す、スゴい……」

「スゴいです、モモンガ様！」

中断させてしまった事を目線で謝りつつ、思考を戻す。アウラとマールレのきらきらとした目を受け喜んでいそうな雰囲気を出しているので、あまり気にしていないようで安心する。

「そういうわけでここでスタッフの実験等、諸々を行いたい。色々準備をして欲しいのだが？」

「はいーかしこまりました。すぐに準備をします。それで……あたしたちもそれを見てよろしいのですか？」

アウラの見てもいいのか？という問いにモモンガからヤスヒロへと視線が投げかけられる。スタッフの実験と称せるモモンガと違い、ヤスヒロは近接戦闘のテストも行うつもりだからだ。補助的なものは既に試してある魔法と違い、近接戦闘のテストは一切行っていない。ここで能力が低く、失望させては——そう考えるが、アウラとマールレの二人は専門的な近接戦闘職ではない。いざとなれば魔法のテストという事でフォローすれば良いか。そう考えてモモンガへと頷きを返す。

「構わないよ。ただ、モモンガさんのギルド武器のテストと違い、私はリハビリを兼ねて近接戦闘の訓練をするつもりだ。だから期待にはあまりそえないかもしれないけどね。」

やったーとびよこびよこ可愛らしく飛び跳ねるアウラ、しかし後半の言葉を飲み込んだのかピタリと止まり、疑問を投げかけてくる。

「リハビリ、ですか？しばらく戦われていなかったという事でしょうか？」

「いや……そうであるともそうでないとも言える。詳しくは皆が揃った時に話すよ。」

「えー……気になります。ん？皆が来たとき、ですか？」

「アウラ、全階層守護者をここに呼んでいる。あと1時間少々で集まるぞ。」

「え？な、なら歓迎の準備を——」

「いや、その必要はない。時間が来るまで実験に付き合ってくれれば良い。」

「そうですか？ん？全階層守護者？シャルティアもですか!？」

「——全階層守護者だ。」

ナザリツクから離れていた時の事をどこまで話すか——。すこし考えて一旦先延ばしにする。近接戦闘能力が著しく低下していた場合、それを理由に誤魔化そうかと思いつつ。

モモンガが全階層守護者が来る事を告げると、しよんぼりとするアウラ。そういえば設定ではシャルティアとアウラは仲が良くないということになっていたなあ、と考えつつ。

訓練―前編

闘技場にて戦闘能力が維持されているかテストする為、モモンガは闘技場の隅に立てられた藁人形にゆっくりと指を伸ばす。自らを見つめる友人と、好奇心という名の輝きが瞳からもれ出ている子供たち二人を窺う。

きちんと攻撃魔法も発動するようお願いつつ、指先に力を集め、そして力ある言葉を紡ぐ。

〈ファイヤーボール
へ火球〉

藁人形へと突きつけた指の先で、炎の玉が膨れ上がり打ち出される。狙い通りに藁人形に着弾し、火球を形成していた炎はぶつかつた衝撃で弾け飛びながら、内部に溜め込んだ炎を一気に撒き散らす。

すべて一瞬の出来事。焼け焦げた藁人形以外に何も残りはしない。

「――アウラ。別の藁人形を準備せよ。」

「あ、はい、ただいま！早く準備して！」

アウラの指示により、待機していた2体のモンスター、体長3m程ある巨体は隆々とした筋肉で構成されており、さらに鋼鉄以上の硬度を持つうろこで覆われている55レベルのモンスター。ドラゴンの血縁の一体が置いてあつた藁人形を新しく立てる。

アウラの魔獣使いとしての能力によって使役されている闘技場の片付け役だ。

ドラゴン・キンが藁人形から離れた所で、新たに〈^{ナバーム}焼夷〉〈火球〉の魔法を放つ。

再詠唱時間の間隔もユグドラシルと同じ、かつ範囲魔法は魔法を選択し、範囲を現すカーソルを移動させないですむ分、早いぐらいだ。

「完璧だ」

攻撃魔法も無事発動し、ユグドラシルからの経験と知識も有用だという事が確認でき、満足感が眩きとなつてこぼれる。

「モモンガ様、藁人形をもつと準備した方がよろしいですか？」

アウラが不思議そうに問いかける。アウラにしてみれば、モモンガが強力な術者である事は前から知っており、これくらいの芸当はなんら不思議は無いからだ。

「……いや、それには及ばない。もつと別の実験を行いたいからな。その間に——ヤスヒロさん、相手は何が良いですか？」

「——まずは、切り裂きジャックジャック・ザ・リックパーをお願ひします。」

この後、モモンガは〈伝言メッセージ〉の魔法でGMや他のナザリックメンバーへと連絡を試みる手筈となっている。その間にヤスヒロ自身は近接戦闘能力を試そうと、モモンガの持つスキル——中位アンデット創造——にて作成できるモンスターを指名する。

モモンガやヤスヒロはもちろん、アウラやマーレでもすぐに倒せる程度の強さしか持たない30レベル台のモンスターだが、防御力とHPが低い代わりに敏捷度と攻撃力が高く設定されている。加えてモモンガの所持するアンデット強化スキルにより強化され、速度に限ると40レベル後半の性能を持つ。

——ユグドラシルの性能のままではそれでも弱すぎるが、ユグドラシル通りの性能を維持出来ているか、実際にゲームではない戦闘で実際の性能を十全に引き出せるかを確認する為には手頃な相手だ。

モモンガはヤスヒロの言葉に頷き、——中位アンデット作成——のスキルにより切り裂きジャックを呼び出す。何も無い空間から湧き出るように現れたのは、笑った表情のマスクを顔に嵌め、ピッチリとしたトレンチコートのような服を身に纏い、まるで服の装飾のように包帯が絡み付いている。

これといった刃物は所持しているように見えないが、手の爪は鋭く長く伸びており、ユグドラシルではおなじみの肉体武器である事を示している。

甲高い声を上げているモンスターを見据えながら、ストレージから1本の剣を抜き取る。

カテゴリーは長剣に属しているのだが、大きくした腰鉈のような外

見をしている。刃は黒く染まっており、刃渡り65cm程はあるだろうか。

切断剣ダイセクトと命名してある伝説級レジェンドアイテムである。

ヤスヒロ本来の主武装である神器級ゴツクラスからは1段劣るが、武器破壊とそれに付随するダメージ少量アップの効果を持つ切断のデータクリスタルと、一時的に相手を朦朧状態にするスタン率上昇のデータクリスタルを大量につき込んでおり、そこそこ使い勝手が良い武器となっている。

訓練で即死されてもあまり意味が無いし、レベル差のある雑魚モンスターに手こずっても示しがない、という妥協をとった武器選択である。

「では……モモンガさん、お願いします！」

「——わかりました。」

切断剣ダイセクトを右手に握り込み、軽く腰を落としてステップを踏む。本来なら反対側に盾かもう一本武器を持ったりするのだが、守護者達アウラとマーレが見ている以上、近接戦闘能力が低下していた際に備え、本気ではなかったという言い訳をする保険として片手のみの装備とする。

モモンガに戦闘開始を頼むと、声には出していないが命令を下したのか切り裂きジャックジャック・ザ・リック・バーが奇声を上げながら突進を始めた。

開始時には7、8m程あった距離をなんとなく詰め、鋭く尖った爪を突き出してくる。握った剣の剣先を下段に構えたまま突き出された爪を一步横にズレる事で回避すると、それに合わせて切り裂きジャックも追撃をかけるべく体を捻って逆の手を突き出す。

もう一度軽く横にステップを刻んで避けると、今度はフックのような軌道で頭部を狙って爪が突き立てられる。こちらは後ろに一步下がって避け、連続して繰り出される攻撃に備える。

突く——避ける

フック——避ける

視界から外れる為、大きく膝を落としてからの攻撃——避ける

左右に体を振ったの攻撃——避ける

フエイントからの足払い——避ける

繰り返される攻撃を避けつつ思う、——遅いのだ。

現実ではあり得なかっただろうし、戦闘に入る前には全く感じなかったのだが、いざ戦闘を行ってみるとまるで世界がスローになったように感じる。

初めは一步ズレるように避けていたのだが、3、4撃避けた後はあえてギリギリで避けるようにしてみるも、相手の攻撃が当たるといいう事もなく軽々と避ける事が出来る。

切り裂きジャック程度の敏捷度だと、ユグドラシルの時も同じように避ける事が出来た。これは近接戦闘能力も維持されているか——そう考えつつ、もう一つの確認は不十分だと感じる。

それは、戦闘で恐怖を感じるかという確認だ。

ユグドラシルの世界では痛覚はほぼ無いに等しい。大ダメージを与える攻撃を受けても、軽くぶつかった程度の衝撃しかなく、恐怖など感じなかった。

しかし今は痛覚がどうなっているかわからない、死んでしまった際に蘇生が出来るかもわからない以上、恐怖を感じるかと考えていたのだが、相手が弱すぎて確認の意味がない。

これ以上は無意味——そう判断して切り裂きジャックの突き出した手へと、右手に握った切断剣を振るう。

結果は切り裂きジャックの手が舞い、切断された腕から勢いよく血が噴出す。切断された手を見つめながら呆然としている相手を一瞬眺めた後——隙だらけの相手の首へと剣を振るう。

「……特になんとも思わない、か。」

自らが振るった剣により、切り裂きジャックの首を刎ね飛ばして消滅させたのだが、召喚モンスターとわかっている相手を死滅させた事になんとも思わない事は理解出来ても、噴出した血液を見ても特に何も感じなかった。

通常の精神をしていたらありえない事だ。——しかし、この結果から心に抱いていた仮説の信憑性を強める。

アンデットの持つ基本特殊能力の一つ、精神作用無効が発動しているのでは。という仮説が。

そもそも異世界に転移したのに随分と冷静さを保っている。そこから思いついた仮説だったのだが、信憑性が増した——。そして事実だとすれば、おそらく他の特殊能力も有効と考えて良いだろう。

これなら、ユグドラシルのほぼ全ての能力を維持出来ていると考えて良いだろう。

安心と興奮から喜色を浮かべるも、精神作用無効の影響からか、やはりすぐに喜色は少なくなる。とはいえ全く無いというわけではないので安堵する。全く感情の無い存在というのも怖いものだと考えて。

「お疲れ様です、ヤスヒロさん。流石ですね。」

「えーつと……お疲れ様です。」

「お、お疲れ様です。ヤ、ヤスヒロ様。」

「……ありがとうございます、モモンガさん。アウラとマーレも。と言ってもただの準備運動だけだね。」

思考を巡らせていると、モモンガから労いの言葉がかけられる。それに従うように、切り裂きジャック程度に訓練していた事を不思議そうに見ていたアウラとマーレも労いの言葉をかけてくれる。

「では……予定通り、次のモンスターを呼びますか？」

「ええ、お願いします。——予定通りのヤツでいきましょう。」

こちらの確認はあらかた終わったのだが、これで終わってはアウラとマーレ観戦者にとっては退屈だっただろうし、失望させてしまうかもしれない。

そして能力が維持されていても、3年間のブランクで戦闘勘も鈍っている。それを取り戻すには訓練も必要だ——。

そう考え、次の相手をする為に再び剣を構える。